

信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書 志賀直哉 『児を盗む話』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字程度で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)

志賀直哉 『児を盗む話』



第 403 回の YouTube 読書会の課題図書は、志賀直哉先生の『児を盗む話』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『児を盗む話』志賀直哉 感想文

「児を盗む」という題名からは何かの比喩であるのだと思われたのだが、現実には児を誘拐してしまう思いがけない話であった。

これは志賀自身の父との対立と、そこから湧き上がってきた精神的な不安からの妄想が作りあげたものなのではないかと、なんとなく伝わってくるものがあった。

冒頭、父に言われた言葉、「将来どうするつもりだ」、「貴様のようなヤクザな奴が……」、ここで既に息子のこの先を左右するような、そしてラストへ続くような親の失言が目映った。

本人はあまり気にしていない風であるが、彼のその後の行動に、その深い傷が尾を引いていくことが理解できる。

冒頭、その父の言葉を書いたことに、当時、身の置き所のない作者の抵抗を感じた。

家を何度も飛び出しては戻るのだが、また瀬戸内海の小さい市へ逃げる。その場所は尾道らしい。

小さい貸家、侘しさの極致のような住まいだが、それらと対照的に窓から見える島、石切場の音、子供達の声などが、彼に長い仕事にとりかかる気力を起こさせる。

東京とは違うこの世界、心模様が映るようなこの清らかな眺めの表現が素晴らしかった。(新潮文庫『清兵衛と瓢箪』『網走まで』p.301)

それらが彼を一時的に喜ばせた。

「私は総てと全く差し向かいになるような気がした」(p.302)

ひとときの安らぎに慣れてしまうと、「孤独」に苛まれる。もし父が息子を信じ、理解していたら、この「孤独」は別な喜びとなっていたであろう。いつも見る悪夢と重い肩こり。

精神的に追い詰められた刹那に起きてしまう事件。『剃刀』、『范の犯罪』などの作品と同じように、「児を盗む」とは、無意識に負へ降下するエアポケットのようなものがあるような気がした。

そして、その刹那にあっさりと女の児の手を悪びれもせずに引いてしまうのだ。「孤独」、「無目的」、「疲労」、「不機嫌」といくつものが重なる。

五、六歳の美しい女の児へ恋に似た感情を抱くということが、児攫(さら)いのそもそもの発端なのだが、この領域もまた精神的な抑圧からの逃避であると思う。

純粹であることを自負しているのだが、やがて「その児を自分のものにしたい」という欲求が湧いてくる。

「純粹な愛情から来る慾望」を正当化し、美しい児を連れ去ることを抑えた自分を腹立たしく思うという表現、そこがとても引っかかった。すでに精神を蝕んでいたのか、この部分が理解できない。

美しい児の代わりに、いつも施術を受けていた按摩の児を連れ去るのだが、最後はその児にも辟易する主人公の身勝手さが何とも異様であった。

(引用はじめ)

「私には自身の仕た事に対する弱々しい常識的な反省が稍(やや)もすると頭をもたげそうにした。私は自分がこんなことをするのも決して一向きな心持ちでしているのではないことをまざまざと感じさせられた。私は不快になった。しかしこんな常識的な反省に自分全体を引き渡すことはできなかった。私のした事は他人に弁解はできないが、自分だけにはそれができるのである。私は私のこの間中の気分を憶うと、若しこんな事でもしなかったら、仕舞いにはどうなるかしれなかったと思う」(p.319)

(引用おわり)

常識的な反省とは、世間でいう良識的な父に従う事であるのだと、だから「美しい児」を連れ去ることを断念した自分を腹立たしく思ったのだと、読みながらこの複雑な心情に気づいた思いがした。

弱々しい良心よりも衝動がまさってしまったという主人公の言い訳は、彼を犯罪者にしてしまった父の「息子への信頼」の欠如からであるのだと、作者が朦朧としながらもその感情の高ぶりを作品に込めていた気がするのだ。

(おわり)

「作品を残していくと云う事」

「児を盗む話」は大正三年四月一日発行の「白樺」第五巻第四号に発表され、大正六年六月、新潮社刊行の「新進作家叢書」中の一冊「大津順吉」に収録された。その際「白樺」での冒頭 4 ページ分、末尾の約 1 ページ弱が削除されたのをはじめ、かなりの修訂がほどこされた。

(引用はじめ)

児を盗む話

(雑誌『白樺』大正三年四月、第五巻第四号)

[発表時の冒頭]

私は五つになる其女の児を盗んだ。然し三日目にもう露われて、巡査が二人と探偵らしい男が一人と、その後ろに色の浅黒い肉のしまった四十ばかりの其児の母親と、これだけが前の急な坂を登って来るのを見た時には私は苦笑した。而して赤面した。

が、私は一寸は迷った。矢張り出来るだけの抵抗はやって見ろ。今若し素直に渡してう位なら最初からこんな事は仕なくてもよかった。こう思うと急いで部屋の隅の行李から出刃包丁を出して、それを逆手に握って部屋の中に立った。其時女の児は次の三畳でグッスリ寝込んでいた。

然し私は結局出刃包丁を振廻す事は仕得なかった。その気になれい(ママ)。実際それ程の感情は出刃包丁を出す時から自分にはなかったのである。而して私は尋常に縄にかかた(ママ)。女の児は其儘母親に連れられて行った(中略)裁判官は繰返し繰返し私の盗んだ目的を訊いたが、私は同じ事きり答えなかった。「可愛く思ったからです。貰いたいと云っても貰れ(ママ)ないと思ったからです」と云った。

若い医者も色々と訊いた。私は訊かれる事だけに只簡単な返事した。

医者は気違いではないと云った。只余程激しい神経衰弱にかかっていると報告した(中略)東京を出る二か月ほど前の事だった。私は私の最も親しい友達の一人と仲たがいをした。同時に私は或る若い美しい女を恋した(中略)私は此女を逆も捕捉しがたい奴と独り決めていた。私は三四度続けて会った(中略)私は又単調な生活に帰って了つた。もう仲たがいの友達に対してもそれほどの怒りは感じられなくなった。何んとかく焦々しながら物足らない心持で一日々々を無為に過ごしていた。

(以下決定稿冒頭に続く)

(発表時の末尾 決定稿の「翌朝ぼんやりと障子の硝子越しに前の景色を見ていた時だった」から末尾に対応)

翌朝ボンヤリと障子の硝子越しに前の景色を見ている時だった。巡査や女の児の母親が前の坂路を此方を見い見い登って来た(中略)母親と女の児は抱合って泣いた。母親は泣きながら烈しく私を罵った(中略)私は警察へ曳かれた(中略)私には気違い染みた気分は少しもない。然し裁判官がそれに近いものと解しようとするのを反対する気はない。

私は多分近日許されて此所を出るだろうと思う。それから私は何所へ行こう？ 矢張り東京へ帰るより仕方がなさそうだ。もうあの市(まち)に行く事は出来ない。東京へ帰らないとすれば、どうするだろう？ 私は又同じような生活に堕ちて行かなければ仕合せである。若し同じ生活が繰返って来れば私は今度は更に容易に同じような事を起し兼ねないと云う気がするから……………

女の児はどうしているだろう？

(志賀直哉全集第二巻 605Pから 608P)

(引用おわり)

初期の作品の多くは全集収録時などに大幅な修訂、カットが行われている。未熟な作品も記録として初出のままで残すべきだという意見もあるが、志賀先生は複数の随筆や対談の中で「自身の作品は読者の書架にあって繰り返し読まれていくべきである」という旨の事を主張されている。

(おわり)

『児を盗む話』感想文

親とうまく行かず悶々とした男が、家を出て部屋を借り、幼女を誘拐する。

仕事をしているみたいだし親など無視してやりたいように生きればいいのに。家を出ても、囚われていた。女兒誘拐には性的イタヅラがセットになっている気がしてしまうけど、その一線は越えていないとさりげなくアピール。実際誘拐をやらかした事があったのかと疑う程、地味でリアルな筆致。もしかしたら、殺めていたかも知れない。『それから』の代助と三千代が、関係していたとは描かれないように。(諸説あり)

小さくて可愛い頼りない物を潰してしまいたい欲望を免れた話。美しい方の児だったらそうになっていたかも…とも思わない。穢らわしさは見せない。けど恐ろしい事件の前段階として使える程のそれ。名を刻むような創作者は、誤解を恐れない。

全集には初出があり、カットした部分のようだ。東京を出る前に、ペパーミントソーダを飲む美しい女に恋をする。更にこの男は警察に曳かれた後、なんと取り調べの医者や裁判官から好意を持たれる。許される俺。後記には当然と思うが「児を盗んでからは空想」と書かれていた。そしてこの作品を「今はもう愛着を持っていない。多少愛着を感じていたこの小説の描写は暗夜行路の前編に使ってしまった。」とある。

『暗夜行路』は、この陰な雰囲気と繋がっていただろうか。以前の雑談で『東京物語』が尾道と縁があるのは小津安二郎監督が志賀直哉から受けた影響と宮澤さんは、お話しされていたかもしれません。志賀直哉は実際家を出て、友人に勧められて行ったという尾道の経験で執筆したというこの作品。

尾道よいとこ一度は行ってみたい。

初出でもそうでしたが「誘拐」とか「さらう」ではなく、一貫して「盗む」と記す事にこだわっている。昔は普通だったのか。単純に「盗む」の方がシンプルで抽象的だからだろうか。

(おわり)

『児を盗む話』 感想文

東京での父との不和や、作家活動の停滞から主人公が向かう所は尾道であり、作者自身も、大正元年 11 月から実際、尾道に住み、『暗夜行路』の前身である『時任謙作』の執筆をこの地で始めている。

『児を盗む話』は大正 3 年発表。今作は「暗夜行路」で尾道に逗留する主人公と、ほぼ同じシチュエーションという事になる。

文章に於いても再利用が目立つ。

寺の参道中腹の貸家、荒療治が噂の盲人の按摩、東京が恋しくなり停車場をぶらぶらする描写。長文でリライトされているのは、誰とも喋らない生活から、「海に向かって大声を出してみるが、力無く悲しげな声になってしまう」という箇所である。

『暗夜行路』では貸家の近所の六つばかりの女の子が、仕事帰りの隣室の爺さんと交流する場面が少しだけ出てくるが、今読み返してみると、若い孤独な作家には、その温かい交流が、羨ましく感じられたのかもしれない。本作でも冒頭部から、逗留中に若い女中を希望していたり、（口入宿の婆さんのナイス判断で却下！）後半の伏線になっていると思った。

その辺りは私小説『大津順吉』の若く年の離れた女中との恋にも描かれており、志賀先生の、赤裸々な部分が出てしまっていると思われる。

作家という職業も、自由な恋愛も認めず、社会に対する思想も相入れない父との葛藤は、30 代になったばかりの主人公には、大きな壁となって立ちちはだかり、その圧迫は「自殺はしないぞ」と意識する程度には大きかった。その全く進めない中でその気持ちは、自分にとって可変な（と思われる）幼女へと向かったのであろう。それまで「顧慮」によって停滞していた人生というものに、ようやく打ち克った「万能の喜び」を、文字に書き残すほど恍惚としていた主人公のテンションは、分からないではないと思った。

（おわり）

人間は、自分の感情をどこまで知っているのか

——人間は、自分の感情をどこまで知っているのか

「貴様は一体そんな事をしていて将来どうするつもりだ」(新潮文庫 P298)。物語は、父親から投げつけられた厳しい言葉から始まる。

さらに「貴様のようなヤクザな奴が、この家に生まれたのは何の罰かと思う」(P298)とまで言われ、主人公は家を飛び出す。

もちろん、父親に叱責されたことが、その後の異常な行動の直接的な原因だとは言えない。

しかし、自分の存在そのものを否定されたような感覚が、彼の心の均衡を崩していったことは確かだろう。

家を出て見つけた貸家。彼の目には、じつとうずくまるコオロギが映る。枕の下からは青黒いムカデが這い出してくる。周囲にはほかにも様々なものがあつたはずなのに、志賀直哉はあえてこの二つを描く。追い詰められ、孤独になった主人公の内面が、外の風景に映し出されているように感じた。

そんな孤独の中で、彼の目は少女へ向かう。なぜ大人の女性ではなく、少女だったのだろう。

自分の意思を持った大人なら、自分を拒絶するかもしれない。

それに対して少女なら、自分の側にいて、自分の孤独を埋めてくれる。そんな身勝手な幻想があつたのかもしれない。

しかし、実際に少女を連れ去ると、今度は罪悪感が生まれ、やがて少女への関心そのものが薄れていく。

あれほど欲しかったはずなのに、手に入れた途端、感情が変わってしまう。そして最後には、自分でもどうしたらよいのか分からず、ただ呆然とする。

彼は、自分のしていることが悪いことだと分かっている。

つまり理性を失っているわけではない。それでも、自分の感情と行動を制御することができない。ここに、この作品の怖さがあるように思う。

人間は、自分の感情を本当に理解しているのだろうか。この問いは、『范の犯罪』にも『剃刀』にも通じている。

『范の犯罪』では、妻を殺したかったという感情がありながら、本当に故意だったのかと問われるうちに、本人自身にも分からなくなっていく。

『剃刀』でも、理性のある人間が、ある瞬間に自分でも説明しきれない行動へと滑り込んでいく。

志賀直哉が描いているのは、「異常な人間」なのではないのかもしれない。人間の心には、自分自身にも分からない部分がある。

感情は揺れ、理性は必ずしもそれを制御できない。

「自分のことは自分が一番よく知っている」と私たちは思っている。

しかし、本当にそうなのだろうか。『児を盗む話』を読み終えて、そんな少し怖い問いが残った。

(おわり)

『児を盗む話』感想文

題名からしてむちゃくちゃな感じがして、どんな話なのかなと少し興味がわきました。

概念的な事なのかと思ったらホントに盗んでくるというかなりぶっ飛んでる感じがすごいなと思いました。

あと、「ヤニッコイ」という言葉がすごく懐かしく思いました。注釈をみるとしつこくて不快。となっていました。私のところでは「ものすごい！」という表現の時に使っていたので、少し似ているけど違うなと思ったりしました。

印象に残っているのは

(引用 はじめ)

田舎の子供らしいいやな臭いがした。何時かこの児を厭きて荷厄介にする時の心持が一寸浮かび上がって来た。

(新潮文庫 P.315)

(引用 おわり)

田舎の子供らしいいやな臭いって何なんだろうと思いましたが、子供がほんとにそこに居る感じが伝わって印象に残りましたし、本来なら身近に居ない存在が居ることの何か違和感てきな感じもしました。

なんかとんでもない話だけど、すごく印象に残るお話だなと思いました。

(おわり)

『児を盗む話』 読書感想文

途中までは東京から地方へ転居して執筆活動が続ける作家のありがちな生活がエッセイのように綴られていました。私も岡山に旅行した時、四国も近いなと思って香川まで足を伸ばしたことがあるので、執筆活動に行き詰まったら息抜きにそんな小旅行くらいするよな、わかるわかと共感しながら読んでいたのですが、何しろタイトルがタイトルだけに徐々に不穏な感じになっていきました。

(引用はじめ)

私は其女の児を盗む事、或いは盗む方法を頻りに空想し始めた。全く孤独に暮らしてゐる私にはさう云う空想が空想で止まつてはゐなかつた。

(引用おわり)

この一文を境にほのぼのエッセイから一気に犯罪小説へ変わってしまいます。

(引用はじめ)

私の子供を盗むといふ空想も日を経るに従つて萎みかけた。然しあれだけに強く起つた純粹に愛情から来る慾望を自分は何の爲におさえられて了つたらうと思ふと腹立たしい気持ちになる。

《何に腹立ててんだ！》

他人の児を盗むと云ふ事は悪い事かも知れないが、絶對的にさう云へるものではない。

《いや絶對に悪い事だろ！》

若い女を愛して、其女が自分をそれ程愛さなくて、其上その女の両親が結婚を拒む場合でも自分が本当に其女を愛してゐるなら無理にも結婚する、かういふ場合がある。

《ない！》

(引用おわり)

突っ込みの連続でした。

(引用はじめ)

私は泣き出した。女の児も急に声を挙げて泣き出した。私はもう何もいへなかつた。暫くして、「寝ような」と云つた。女の児は私の顔を見ずに首肯いた。

(引用おわり)

この誘拐された女兒は過酷な状況で犯人に対して親近感を持ってしまうストックホルム症候群に陥ってしまったのかなと思いました。

書き出しのところで父親が

「貴様のやうなヤクザな奴が此家に生まれたのは何の罰かと思ふ」とか色々ひどい言葉を主人公に言っていて、なんでそんなことを言うのかと思いましたが、読後は父親は主人公の本性を知っていたんだな、これがフリだったのかという気持ちになりました。

私が女性のためか、トラウマになること確実な経験をしたこの女兒に同情するとともに、主人公に対する怒りしか抱けず、この作品から何を讀み取ればいいのかわかりませんでした。

強いていえば「日常に潜む狂気」とかかなあ。もし「作家もつらいよ」的なことだったら、ふざけんなと言ってやりたいです。

(おわり)

志賀直哉 『児を盗む話』読書感想文

志賀文学の大きなテーマの一つは、父子の対立である。

『児を盗む話』の主人公は、父親から「現代の弊害を集めたような男」と罵倒される。これは個人的な非難を超え、既存の秩序が新しく現れようとする存在を否定する言葉として読める。

そこで今回はハンナ・アーレントの『人間の条件』の中で述べられている「出生」と「複数性」の思想を手がかり本作を考えてみたい。

アーレントによれば、人間が新たに生まれ来ることは、単なる生物学的事実ではなく、既存の世界に「はじまり」をもたらす可能性である。その可能性は、他者の前に「現れる」こと、すなわち複数性の中で行為として開かれるときに初めて意味を持つ。

したがって、父が息子を家という枠組みに留め、それが決裂する構図は、既存の秩序による私的領域への閉じ込めの失敗と新世代の台頭として読むことができる。

しかし、家を出た主人公は、尾道での単調な日常の中で精神的に沈滞し、創作意欲を失う。その行き詰まりの中で彼が強く惹かれたのが、美しい女児の存在であった。これは、停滞した生の中で「新しい刺激」や「美」に触れ、創作意欲を回復させようとする欲求の表れである。問題は、彼がその存在を一つの「あらわれ」として観照し、美的判断を展開しようとしたのではなく、盗むという行為によって自らの私的領域に取り込もうとした点にある。

つまり、父が息子を「弊害」として否定し、私的領域に留めようとしたように、息子もまた、若い存在を自らの私的領域にて独占し、可能性の芽を摘もうとしたのである。ここに新しいものが世界に「現れる」ことを阻むことの父子間での再生産を見ることができる。

さらに重要なのは、この行為が創作意欲の回復にも失敗している点だ。彼は女児を取り込むことで創作意欲を回復しようとした。しかし、盗んだ後に彼女への関心は薄れ、行為は空虚なまま終わる。これは、「はじまり」を私的領域に閉じ込めた瞬間に、複数性の中で有していた本来の魅力を失った結果とも言えよう。

すなわち、新しいものを独占することで創作の源泉を得ようとした欲望は、結局、自我の行き詰まりを打開できなかったのである。

このように『児を盗む話』は、父子対立を通じて「新しいものが既存の秩序によって否定される」構図を描くだけでなく、その構図が抑圧された側の内部で反復され、創作という行為そのものの回復すら阻むことを示しているのである。

(おわり)

刺激こそ地産地消たれ

無為な生活を変えるべく、按摩よりも強力な精神的刺激を求めて奔走した挙句、気が付けば人道に反してしまっていたというのはまああるのであって、鬱屈した心持のままにその願望を実現させようとする手段を選ぶことすら覚束なくなる。それだから作中の「私」は児を盗んだのであり、この顛末をいわゆる小人閑居だよーと十把一絡げに片付けては何だか勿体ない、明日は我が身だと自らに言い聞かせるべき逸話である。つまり、我々が何か為す場合、現実を見据えた適切な精進が必要なのであり、それは単純でありながら覚悟を要する。例えば、地方出身者が「東京へ行けば何かあるかも」という希望と共に頭陀袋を背負って遠路はるばる東京さ来たかと思えば、その数年後、生きづらいのか闇バイトに手を染めたり、夢破れたのか田舎へ帰ったり、自己破産したりなんて事例は掃いて捨てるほどにある。ある日、東京で生きづらそうな彼は私に言った「東京の居酒屋に行ったら床にネズミの足跡が付いていて最悪だった」と。そして去り際に言った「東京には何かあるようで何もないんだね」と最後まで他力本願の彼が田舎に引っ込んだのは賢明な判断といえる。

じゃあオマエはどうなんだよ似たような経験ねーのかよこのハゲ、と東京人である私に対し反発する地方出身者が少なからずいるに違いない。はっきり言って私にとって東京の刺激なんぞ刺激ではなくもはや日常であり退屈極まりない。で、そうなつては小人閑居に陥るため、地方出身者が東京を目指すように私の場合は田舎を目指すのである、刺激ある豊かな生活を求めて。それが証拠に私ときたらここ数年前から毎年、四国西国へ赴いて遍路参りに勤しんでいる。すごいでしょ。かつて志賀氏が暮らした尾道から瀬戸内海に掛かるしまなみ海道を渡れば四国は目と鼻の先、瀬戸は日暮れて夕波小波、小島が点々として浮かんでいる風景に、きれいだな、良い所だな、住んでみたいな、といった田舎から受ける刺激に心を動かされたりもするがそんなものは嘘っぱちであり、大抵二日で興味は失せる。三日目以降になるとああもう田舎ってのは——遠すぎるコンビニ、乱立するイオンモール、態度のでかいおじさん、愛想の無いお婆さん、パチンコ、ラーメン、ドンキホーテ、パチンコ、ラーメン、ドンキホーテ……この代わり映えない有様にどうも気分がくさくさして仕方がなく、移住もいいよなあという当初の考えとは裏腹にそそくさと東京へ逃げ帰るのが恒例となっている。ということは、地方出身者が東京へ行くのも、東京出身者が地方へ行くのも位置が異なるだけで刺激という点においては大して変わらず、結局のところ行為の主体である己に懸かっているものと思えてくるのである。

作中において <<鳩があぶないのか自分があぶないのかはっきりしなかった>> と自他の区別もないままに <<イゴイステイックな行為>> に陥るのは、その単調な生活の繰り返しを半ば強引に改善しようとするからであり、前述した通り明日は我が身である。が、やはり人生には多少の刺激がほしいのが人情であり、かといって外的な刺激に頼ってしまえばこの男の様に歯止めが利かなくなる。万引き、カツアゲ、ピンポンダッシュ、スカートめくり、etc……それは一過性の刺激でしかなく、であれば刺激とは自らで生産して消費せよ、つまり地産地消であれと言いたいのであって、例えばまあなんていうか、絵とか描いたり、短歌とか作ってみたり、蕎麦とか打ったり、稲作とかすればいいと思うし、県外への転地は精神衛生上、二泊三日以内に留めるのが最適なんだと言いたい。

といったことを考えながら、といったようなことをパチンコ屋で考えていた。

以上

(おわり)

無意識の願望

(引用はじめ)

踏切のところまで来ると白い鳩が一羽線路の中を首を動かしながら歩いていた。私は立ち留まってぼんやりそれを見ていた。「汽車が来るとあぶない」というような事を考えていた。それが、鳩があぶないのか、自分があぶないのかはつきりしなかった。然し鳩があぶない事はないと気がついた。自分も線路の外にいるのだから、あぶない事はないと思った。そして私は踏切を越えて町の方へ歩いて行った。

「自殺はしないぞ」私はこんな事を考えていた。(P.310)

(引用おわり)

漠然と自殺を考えていた男が、自殺しないぞと決心した途端に、女兒を誘拐したいという欲望に駆られて、それを実行してしまう。この心理の飛躍にどういう分析を施したらいいのか、読者は途惑うのである。

私は、キルケゴールの『死に至る病』の第一部にある絶望の3段階のことを思い出した。

絶望していることに気づかない段階、絶望して自分自身であろうとしない段階、絶望して強情になり周囲を自分の絶望に巻き込む段階、この3段階が人間の絶望にはあるのだという。

『児を盗む話』は、この3段階目の、周囲を巻き込む段階まで振り切っていると思う。

私は、この作品を読みながらシドニー・ルメット監督の『狼たちの午後』という映画を思い出した。同性愛者が、なんかの弾みで友人と銀行に立てこもるという話であった。アル・パチーノ演じる主人公は、生活上の行き詰まりを感じて、無計画に銀行強盗を実行する。やがて、周囲を取り囲んだ野次馬の社会不満を焚き付けて、扇動しようとするのである。

行き当たりばったり感が、本作に似ている。

(引用はじめ)

然し私は結局出刃包丁を振り廻す事は仕得なかった。その気になれない。実際、それ程の感情は出刃包丁を出す時から自分にはなかったのである。(P.225)

(引用おわり)

映画化すれば、出刃包丁で自分を突き刺すというラストになるのではないかな？

この出刃包丁は、彼を捕まえようとする者を刺すために用意していたのか、それとも無意識の死の欲動があり、自分を処するために用意していたのか。私は後者であるような気がする。逆手に持って自分を刺すこともできるはずなのである。

だが、結局漫然と捕まったのは、「自殺はしないぞ」という最初の決心と符合する。

この作品は、志賀先生が、絶望からの「自殺」ということに向かいあった作品であると思う。太宰は、何度も心中未遂しているが、不思議なことに、彼は、こういうふうに分の無意識の領域での「自殺願望」は作品において表現していない。私の読んだ限りでは。

(おわり)